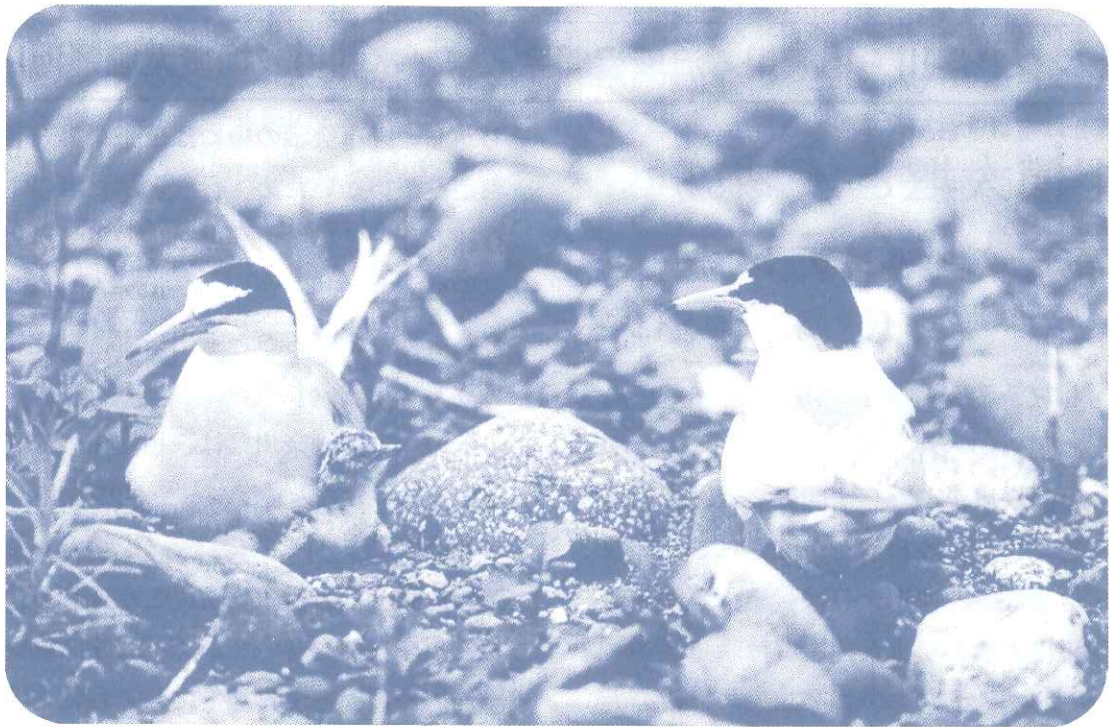
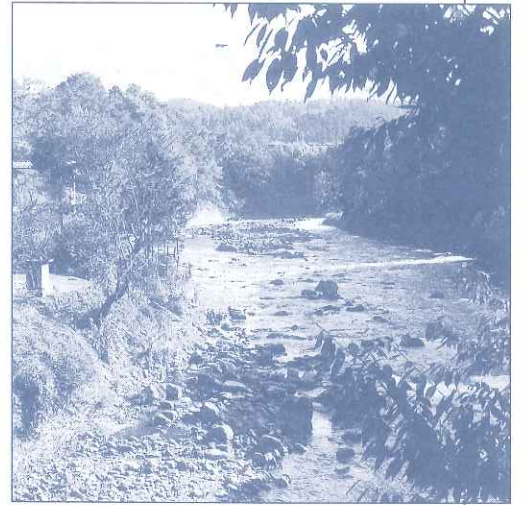


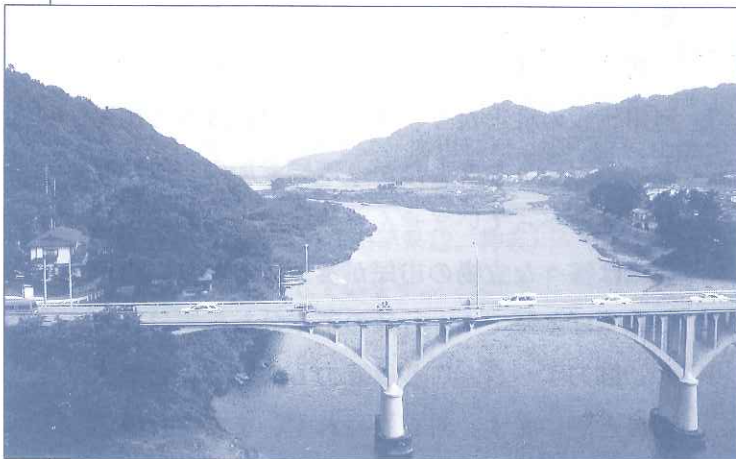
# あじえんた

創刊号

▼秋の桂川（山梨県都留市内）



◀河原で子育てをするコアジサシ（撮影／塩原昭夫）



▲小倉橋（神奈川県城山町）

## 《もくじ》

- キーワード随想……………2
- 大漁のシラスをお土産に……………6
- いい汗流した夏の日……………7
- 市民・事業者・行政から……………8
- 相模川の中州にあった「猿ヶ島」…11
- お知らせ……………12

桂川・相模川流域協議会



## 《キーワード随想》

# アジェンダ21桂川・相模川



カワラノギク  
(撮影／塩原 昭夫)

## 相模大堰と流域協議会と僕のテント

氏 家 雅 仁

今年、相模大堰が完成してしまい、6月15日にゲートが閉め切られ、相模川がまた一つ分断されました。大堰がもたらす問題点は、①相模大堰の建設により川の自然が破壊される、②既設の寒川取水施設を使用すれば相模大堰は必要ない、③相模大堰の莫大な建設費は水道料金の大幅な値上げをもたらす、神奈川県の大きな負担となる、等です。そして今年、相模川の天然アユは激減してしまいました。また、毎秒1.5トンの相模大堰の暫定運用が7月に開始されたとたん、そのぶん寒川取水施設が遊休化してしまいました。近い将来、水道料金の大幅な値上げも避けられないでしょう。

私が所属する相模川キャンペーンシンポジウムは、相模大堰の裁判や、神奈川県や神奈川県内広域水道企業団との「相模大堰円卓会議」の議論の中で、大堰建設の理由を検証し、大堰建設の必要がないことを明らかにしてきました。

しかし、円卓会議の場には公平な第3者による判定役がないため、行政と私たちの主張は平行線となっています。どちらの主張が相模川と県民の未来にとってよいのかの判定は得られず、合意を作りあげることが出来ず、対立ばかりが目立ちます。

その一方で神奈川県は、相模川の流域環境保全の新しい取組み「アジェンダ21桂川・相模川」を進めています。アジェンダを策定、推進する流域協議会は、行政と市民と事業者が協働して相模川の自然を守っていく場です。協議会の事務局の一員として参加している私にとって、対立と協働の狭間で微妙なバランスをとるのは大変です。

河川法の改正で、治水や利水とともに環境が河川行政の柱となり、また、河川行政への市民参加が定められましたが、市民参加の方法はまだ出来上がっていません。流域協議会の市民部会には様々な立場の市民が参加しており、市民の意見は多様です。行政の不十分な施策は批判し、協力すべきところは協力していくことが大切だと思います。対立を恐れず、また、行政の良い施策には積極的に協力しながら、桂川・



●「清く豊かに川は流れる」流域を目指し、市民、事業者、行政という立場の異なる3者が、21世紀に向けた行動計画「アジェンダ21桂川・相模川」を合意しました。アジェンダとは「議題」「課題」の意味で、ここでは「今から取り組んでいく課題一覧」の意味で使われています。アジェンダ21は、21世紀に向けた課題という意味です。その推進母体として桂川・相模川流域協議会が本年1月に発足し、山梨・神奈川の県境を越えて流域で活躍する全国に例を見ない取り組みを始めました。

流域に住む人々や流域外で水を利用する人たちの

多様な意見、立場の違いをお互いに認識し協調して環境保全を進めるために、この会報では流域の課題となるテーマを決めた意見発表のコーナーを設けます。そのテーマにそって、指定されたキーワードの中から3つ以上を選び、3主体の方々を書いていただくことにしました。

最初是不協和音のように思えるそれぞれの意見も、いつか私たちが理想とする川のように、豊かな流れ、快い水音となって響き合い、環境負荷の少ない流域循環型社会が実現する日が来ることを願いながら、第1弾をお届けします。

／相模川独自の市民参加の方法を作り上げることを夢見ています。

最後に、今年一番くやしく怖かったことを書きます。相模大堰のゲートが降りる当日、私と友人は中州にテントを張り、座り込みを行いました。しかし、企業団は私たちの身の危険にかまわずにゲートを降ろし、水位を上げました。そして、中州は水没し、水圧により私のテントは一瞬のうちに潰れて流失してしまいました。もしもテントの中に座り込んでいたら、私たちの命は無かったかもしれません。相模大堰建設を進めるためには、市民である私たちの命はどうなってもいいのでしょうか。

私と企業団は、相模大堰問題では対立していますが、相模川の環境保全では協働することを望んでいます。私のテントは現在も壊れたままで、キャンプに使えずに困っています。たかがテントと思われるかもしれませんが、私にとっては思い出がしみ込んだ大切なテントです。感情的なしこりを取り除くためにも、まずはテントの現状回復を求めます。

(相模川キャンペーンシンポジウム  
／相模大堰差し止め訴訟原告団)

## 富士北麓の水の捨て場所——桂川

勝 俣 源 一

富士北麓に住んでいると、川を見るのは大水が出たときぐらいだ、と言われる。普段は川にあまり関心がない自分たちが使った水が、下流でどんな使われ方をしているのか、考えもしないのが普通の生活である。それは、水や川に対して、今まで進めてきた地域や、行政側の考え方が多分にあるように思う。

私の地域も近々、河川改修がなされるようだ。桂川の支流の小佐野川だが、地元説明会すらないし、下流の改修を見ていると、見た目は自然にやさしいように思える。お金をかけるにつけ、もっと考えて欲しい事がいっぱいあるが、ここでは紙面の都合で後にしておく。要するに、川に関心を持つように進めてほしいのだ。

私は桂川の源流域の中で、吉田地域にわずかに残る自然のままの姿が好きだ。ときどきそこを訪れるが、ときに、ヤマセミに出会うことこともある。東京から川を見に来たお客さんを案



内したときに、とても感心されたことだが、もう桂川はほとんど、水の流れる水路になってしまっている。人をよせつけないコンクリートでかためられては、東京電力の水路のようなもので、水利用をしている東電の方が、うまく水路を管理しているように思える。

近年、下水道について住民の話を聞く機会があった。各戸が下水道に参加してほしいとのことだが、年金生活者まで入らなければならないのか。客商売の店は下水道には入っていないとか、住宅分譲地に下水道はないから側溝へ、と言った具合いだ。行政側が遅れてしまっている、そう思えてしかたがないのである。土木行政が、河川に対して、民意のある河川づくりを進められるような環境づくりや、河川法改正も必要だろうと思うが、しよせん上流では、水は下に流れてしまうという考え方をいかに変えてゆくかが、今後の問題であろう。桂川支流小佐野川の改修工事や、ゴミを見ていると、魚が住める環境を取り戻すのは夢物語で終わってしまうだろう、と心配になる。 (めだかの学校代表)

## 桂川・相模川流域 協議会に参加して

鈴木 幹 夫

当社は、桂川・相模川流域協議会に事業者の一員として参加しております。

「清く豊かな桂川・相模川」を実現するための行動計画、「アジェンダ21桂川・相模川」について、事業者として参画できることを考えてみました。

一般に、企業が事業活動を通して環境に与える負荷は一般市民に比べ大きなものになります。企業は、事業活動を通して利潤を追求する組織ですが、現在の社会は、企業に対し、さまざまな環境への配慮を求めるようになってきました。その一例がISO14000「環境マネー



▲桂川の支川・宮川（山梨県富士吉田市）

ジメントシステム」と考えられます。

ISO14000では「事業活動、製品及びサービスに係わる環境負荷の低減」、「地域環境保全」、「地球環境保全」、「生態系の保全」、「資源の有効活用」等に関し、自社の環境改善目標や環境自主規範を設定し、実現していくものとされています。これらの企業の環境保全活動は、費用がかかり、コスト増をもたらす行動と考えられますが、「省資源・資源の有効利用」の実行は、環境への負荷を低減しつつ企業へのコスト減をもたらしたりします。また、廃棄物を加工し他の用途への転用する等の措置も考えられます。企業の環境への配慮は、その負荷量が大きいくらいに、その影響は大きいといえます。

このような企業における環境への配慮や努力は、企業内だけでなくその社員、家族への環境に対する関心を深め、環境への配慮につながると思います。

「アジェンダ21桂川・相模川」の実現には、その中で述べられているように、多くの人に関心を持ち、市民、行政、事業者がそれぞれの考えを出し合い、それぞれの立場、問題を考えながら進めていかなければならないと思います。

当社は、環境コンサルタントを業務としており、今回の行動計画作成に多少なりとも役に立てればと考えております。

(新日本気象海洋株式会社)



# 「上流の思想と 下流の思想」

栗原 雅 智

桂川・相模川流域協議会会報の発刊にあたり、所信の一端を披露させていただきます。

この流域協議会は、桂川・相模川流域の環境保全の行動計画であります「アジェンダ21桂川・相模川」の推進母体として発足しました。

既に、山梨・神奈川両県の流域に生活する、市民・事業者・行政が緊密な連携を図りながら、総合的な環境保全に取り組むため、多様な活動を開始しております。

私たちは、今、水の利用による有形無形の恩恵と人々の生活との関係について、真剣に捉え直し、この流域環境を守り、次世代に手渡すことによって、人と自然が共に生きることができるとことを実証する責務があります。

さて、桂川の語源は「水の流れ」を意味するという説もあり、まさに清き流れそのものを名前前にいただく川の中の川といった趣があり、環境保全への思いがひとしおであります。

上流域である富士吉田市には、「環境首都やまなし」の拠点施設であります「環境科学研究所」、また、環境庁の自然環境調査資料館として「生物多様性センター」が整備されております。本市も、環境保全活動に積極的に取り組み、平成8年度には厚生大臣から「クリーン・リサイクル・タウン」として選定され、その活動全



▲相模湖（神奈川県藤野町）

般が高い評価を受けております。

このような上流の思想と下流の思想がしなやかに結合し、流域の環境保全活動に取り組むとき、必ず波及的な成果が生まれると確信しております。

今後、会員各位を軸として、広く流域関係者まで活動範囲が拡大し、全国的にも先駆的な取り組みとして誇れることを夢の一つとして掲げてまいりたいと考えております。

（富士吉田市長）

## それぞれのベクトル を同調させながら

吉澤 猛

私たち藤野町も参加させていただいております桂川・相模川流域協議会は、98年の1月にアジェンダ21桂川・相模川を策定いたしました。市民・企業・行政と立場の違いを越えて、同じ方向を見つめながら歩んで行く試みが今始まっています。

最初のことから、出来上がったものはモザイク模様で（けっして玉虫色でないと思えます）それぞれの立場の方々が、それぞれにフラストレーションをためながら策定の運びとなったものです。

しかしながらこれは、けっして妥協の産物ではありません。なぜなら、これは始まりであり、最終決定ではないからです。流域環境を保全しつつ水利用をはかるという、とても難しい問題を、市民・企業・行政それぞれの主体性のベクトルを同調させながら解決していこうというものだからです。

私たちも、水源の町としての立場を踏まえながら、流域協議会の示すベクトルに波長を合わせて、モザイク模様が虹色の夢となるように、一緒に努力していきたいと思っています。

（藤野町産業建設部まちづくり課）



## 大漁のシラスをお土産に

### —神奈川県茅ヶ崎市海岸にて—

暦の上では秋本番、上下流交流事業の行われる10月4日（日）当日は今までの天気は嘘のように晴れわたり、素晴らしいほどの一日となった。

茅ヶ崎海岸は、数組のグループがいるだけで、夏の喧騒はもうすでになく、参加者を待ち受けるための準備が着々と進んでいる。

山梨県から参加される方々を乗せたバスは予定時間よりも早く到着し—安心。一都二県からの参加者は全員で200名となった。

予定より早く開会式が始まり、役員の挨拶や事務局からの日程の確認、そして注意事項などの説明がひととおり行われた。

「地引網」の場所は開会式を行った場所から小田原方面に500mくらい歩いた場所と決まり、参加者はそれぞれ会場へと移動を開始する。

途中、子供たちは波と戯れたり、砂で遊んだり久し振りの海の感触を楽しんでいる。海に来た方が多いのか、早々と会場の土手の草地に腰をおろしている人や、日向ぼっこをしている人、地引網の準備をしている作業の方と話したり、それぞれ網を引きあげるまでの時間を有意義に過ごしている。



▲大量のゴミに、用意した袋はすぐ品切れに。河口にて。

参加者の方々が網を引きあげ始めてから約20分、ついに網の最後の部分が浜辺に引きあげられた。網の中には、大きな魚が入っている。

長い魚もいる。そして、メインの獲物のシラス、

### 楽しみながら、上流と下流で情報交換

上流は緑多い山梨。川沿いに住宅が建ち並ぶ下流の神奈川。それぞれに生活の場でみる川の顔は異なります。そんな両県の人々が情報交換し、行政区を越えて協力し合うことが桂川・相模川流域の環境保全の一步となるとの思いから、今年度は2回、上下流交流事業を行いました。

それもたくさん入っている。今まで網を引きあげていた子供も大人も、周りで見学していた方々も、あつという間にとれた魚の所に集まって、網元さんの作業に見入っている。ときどき聞こえる歓声から、思いのほか魚は獲れているようであり、参加された方全員に、おみやげとして持ち帰っていただけそうで安心する。

本日獲れた魚は、スズキ、アナゴ、アジの仲間、フグ、そしてたくさんのシラスなど。皆さんどうもおつかれ様でした。

昼食後は、相模川河口において「干潟の清掃」を行う。参加者はグループにわかれ、可燃物、不燃物別に袋に集めたゴミを入れてもらう。用意した200枚の袋はすぐに使い切ってしまう。

都会の近くの河口は、どこも人間が出したゴミでいっぱい。どうしてこんなにゴミがあるのかと不思議になるし、やりきれない気持ちにもなる。一人ひとりのちょっとした気づかいでゴミが減ると思うのだが……。

ゴミの清掃後、グループごとの交流会に入ってもらおう。皆さんが熱心に話をしていて、予定の時間では足りないグループもあったようである。それにしても、本日参加された大人の方、子供たちはそれぞれどのように感じたのか。地引網で捕れた魚を見ては大いに喜び、河口で見たゴミには大きなため息を付いていたが……。

閉会式も無事終了し、帰りには「シラス」を、一人1袋ずつ手渡した。 tonightには、とてもおいしい「シラス」が参加者の各家庭で食されることになり、今回の交流事業はよい思い出になるのではないかと思う。

（事業担当幹事 渡邊 力）



## ②森林の下草刈り

# いい汗流した夏の日

## —山梨県大月市真木地区にて—

桂川・相模川流域協議会が発足してから最初の上下流交流事業として、大月市真木地内の山梨県有林で、森林の下草刈りが催されました。

国道20号線甲府方面大月インターを過ぎ、三つ目の信号を右折すると真木の集落に入ります。しばらくは緩やかな坂道を登り、真木温泉の看板を通り過ぎると、道の左右に人家が点在する典型的な里山の風景が目に広がります。ハマイバの溪流釣り場を過ぎると、山は狭まり、深山幽谷の相を呈してきます。集合場所である市営テニスコート駐車場までは約15分ほどのドライブでした。

天候不順が心配されましたが、8月4日当日は晴れ。神奈川県からの最後のバスが11時過ぎに到着しました。山梨県・代表幹事河西さんの挨拶に続き、大月林務事務所課長から作業上の説明を受け、総勢150名ほどが10のグループに分かれて現場に向かいました。ここからはかなり急な林道を登ること約10分、林道の左右に広がった1.5ヘクタールにわたる下草刈りが行われました。

かなりの重労働と思われましたが、比較的緩斜面だったことと、植えられた樹木が二年目で高さが高かったため、作業は1時間あまりで終了しました。ひと汗かいて腹を空かした昼食は楽しいものですが、この日(株)笹一酒造さんから提供された「笹子峠の御前水」は好評で、お土産代りにボトルにつめて持ち帰る人もいたようです。

昼食後は、昨年の植樹に参加した人々が、それぞれ植えた場所で記念撮影をする姿が見受けられました。去年植えられた、ひのき、けやき、かつらの幼木は山肌にしっかり根を張り、その成長が確認されました。

山の天気は変わりやすく、自然観察をしながらの帰りには雨が降り始めました。しかし雨足がひどくなるほどでもなく、上下流双方の参加者による意見交換会は集合場所に近い杉林のなかで行われ、たくさんの有益な意見が出ました。



▲下草刈りもこんな所ばかりだと楽だけれども……

この日下草刈りに参加した人々は、神奈川県側100名、山梨県側50名の総勢150名ほど。このうち一般参加者は約80名で、ほとんど神奈川県からの参加であり、山梨県の一般参加者が少ないことが気になる所です。意見交換の中からみえてきたことは、神奈川県からの参加者の多くは自然を求めていること、その中には地方から都会に出てきた人が予想以上に多いことでした。

一方、山梨県の方はどうでしょうか。桂川流域の住民だけでなく多くの県民が、経済優先や生活向上と引き換えに豊かな自然が失われていることに気づいています。下流域に住む人々は、上流域に住む人々が感じている悪化しつつある環境に、あこがれをもっているのです。

山梨県の流域住民が環境問題に無関心かという点、そんなことはなく、各地域ごとに様々な活動をしている市民や団体があります。ただそれらの行動が小さな範囲にとどまっていることが問題ではないでしょうか。上流域と下流域の住民の間に意識のずれがあるのは当然のことです。前述したいろいろな意見と併せて考えると、上下流の交流事業が出発点となるのではないかと思います。

アイデアはたくさん出ています。かたくるしくない楽しい環境保全活動にするためには何が必要なのか、みんなで考えていこうではありませんか。裏方さんになった両県の行政の皆さん、おいしい水の提供と仮設トイレの設置に協力してくれた(株)笹一酒造さん、そして桂川・相模川流域協議会のスタッフの皆さん、ご苦労様でした。

(事業担当幹事 高木 弘)



## しなやかに したたかに

### 「市民部会」へのおさそい

日本各地の河川にさまざまな流域協議会がありますが桂川・相模川流域協議会の特徴は、市民・事業者・行政の三者によるパートナーシップの“具体的な実践”です。

『循環』、『共生』、『参加』というキーワードを立てて、高い理想のアジェンダを創ろうとする三者の強い意志がなければ、この協議会は成り立ちません。三者のどれが欠けても、21世紀の次世代に繋いでゆく、桂川・相模川の環境保全はありえないのです。

法的拘束力をもたないアジェンダはいわば三者の約束ごとであり、「行動指針」です。これを推進するためにはそれぞれ主体にもフレキシブルな仕組みが必要であり、上意下達のピラミッド型の権力構造ではない合意の形成が必要です。縦割り行政の枠を越えて、総合的な視野をもたなければならない行政にしてもそうです。他の部局の施策には無関心を決め込んでいたり住民の意見を無視したりして強引にものごとを進めていった従来の方法は過去のものとしなければならないでしょう。

事業者にしても、利益さえ上がればよいというだけの営業方針は転換して、地域と一体となって行動する、地域に利益を還元するといった考え方や、「流域のあらゆる命のために……」といったそれまで考えられなかった視点も当然必要になるでしょう。

市民もいままでのように「おねだり、しからずんば対決」といった図式から脱却して、いかにして合意形成を図るかといった知恵を活かすことが求められています。市民なら誰でもが参加できるというのが、アジェンダ21市民会議を

引き継いだ「市民部会」の役割ですが、その部会の進め方についても運営の仕方についても工夫が必要でしょう。上流は山中湖から、下流は河口の平塚、茅ヶ崎からも多くの市民が参加しています。地域の実情はそれぞれ異なるし、課題への取り組み方や姿勢も違う。そうした状況にある市民会議の、多数決を行わない意志決定の方法などは、時間はかかるだろうし、互いに十分納得できるとは限りません。しかし、これは参加した市民各自の真剣な議論を保證することでもあります。

流域協議会の運営、事業、専門部会などの内容を検討して、幹事会へと提案することも市民部会の役割の一つです。市民といっても行政や事業者のように、存在自体の目的がはっきりしているわけではありません。けっして一枚岩ではありえないのです。桂川・相模川に対しての自分たち自身の関わり方についても議論がまだまだ足りません。

なぜ、桂川・相模川の環境を保全しなければならないのか、私たちはどうするつもりなのか。アジェンダの要である基本理念を含めて、「流域のあらゆる命のために 清く豊かに川は流れる」という『市民版のアジェンダ21』も完成したいと考えています。

市民部会は、自ら理想を高く掲げ、流域の生活に根ざした市民として、より実際的な提案を行い、具体的な行動を提起し、実践する会です。より多くの「流域人たち」の参加を期待しています。

(石田 幸彦)

毎月第1土曜日 午後1時から5時

八王子市総合福祉センターにて

(JR・京王高尾駅より徒歩7分)

〈連絡先〉 0427-41-6663 氏家 雅仁

FAX共用 0554-45-1964 篠田 授樹



## 「うまい酒はうまい水から」

笹一酒造(株)をたずねて

7月18日にはアジェンダ桂川・相模川流域協議会の幹事会が笹一酒造さんの申し出により、同社の会議室で行われました。

会議終了後、蔵などの見学をさせていただきました。

桂川の支流である笹子川に斜めに交差して、国道20号線が通っています。この国道に面して、社屋そして蔵や販売所が建っています。後ろには鶴ガ鳥屋山・清八峠・本社ガ丸が並び、地下水の豊かさを思わせます。取水している井戸は30mの深さがあり、汲み上げた地下水は冷たく、ひととき暑さを忘れさせてくれました。

酒造りには、水が決め手の一つで、コウジ菌や微生物を純粋培養しないと、よいお酒ができないとのことでした。そのために工場内の清潔を心掛け、水の確保にはたいへん気を遣っておられるとのことでした。



▲笹子川沿いに建つ笹一酒造(株)



◀酒づくりには湧水が使われる

社内にある3本の井戸から日量200トンの水を汲み出して、酒造り、リユース用のビン洗浄、そしてミネラルウォーター用などに使用しているそうです。

水使用後の排水は、汚染の度合いにより3つに分け、合併処理浄化槽できれいにしたうえで、笹子川に流れ込む山からの小さな流れに排水されていました。

「森林の下草刈り体験」では笹一酒造(株)より湧き水を提供いただき、参加者にたいへん喜ばれました。

その後届いたお礼のはがきをご紹介します。

謹んで申し上げます。

8月4日のことは決して忘れません。

おいしい湧き水、甘露を賜りまして誠にありがとうございました。

神奈川県民を代表して

齊藤 やよい (茅ヶ崎市)

(レポーター 中村 道子)

### 桂川・相模川流域協議会協議会定期総会の開催

1998年5月23日(土)に八王子市民会館において、1998(平成10)年度の定期総会が開催されました。

開会に引き続き、桑垣代表幹事から、「県境を越えて、流域環境の保全に向けて多くの人たちが集い、環境について話し合い場ができました。十分に意見を出していただき、よりよい流域協議会の形を考えていく第一歩とさせていただきます」とあいさつがありました。

つづいて、市民部会の江口会員が議長に指名され、議事が進行されました。

当日審議を予定した5つの議案すべてについて、了承、承認などの手続きがなされ、定期総会は、円滑に終了いたしました。

また、総会終了後には、参加者による懇談会が行われました。上、中、下流の3地域に分かれて、それぞれの地域の現状や問題点などについて話し合いがなされました。



## ～最下流のまちから～

### —平塚市—

こんにちは！ 平塚市です。

私どもは、最下流に位置する自治体ですが、みなさんと一緒に「アジェンダ21桂川・相模川」に取り組みたいと思います。

当市は、神奈川県ほぼ中央南部の相模湾に面した人口25万余のまちで、七夕まつりは豪華な竹飾りで知られています。また、Jリーグ「ベルマーレ平塚」のホームタウンともなっていて、最近までは中田選手（山梨県出身）が活躍していました。今夏は、地元の平塚学園高校が初めて甲子園に出場を果たしました。

ところで、当市の東境を流れる相模川下流を馬入川と呼んでいます。言い伝えによりますと、鎌倉時代に源頼朝公が乗馬もろともこの川に落ちてしまったことから、名が付いたと言われております。

この相模川の水は、私たち平塚市民の飲料水源として利用されており、特に大切です。どうか、上流のみなさん、いつまでもおいしくて、しかも安心して飲める水を提供して下さるようお願いいたします。

今年、市が開いた夏休みこども環境教室で、こどもたちと一緒に漁船に乗って相模湾を調査しましたが、潮目に漂うごみの多さに驚きました。まさに、陸から川に、川から海への繋がりを改めて考えさせられた次第です。ことに相模川などの河川敷は、格好のごみ捨て場となるらしく、いろいろな廃棄物が捨てられているのを目にします。

このようなことから、建設省の協力を得て河川敷の一部を「お花畑」にしてみました。コスモスやポピーなどの草花を大量に育て、市民の

憩いの場として親しまれるようにしましたが、一方では生態系を崩すものだという批判もあります。しかし、雑草が生い茂ったごみ捨て場となるよりも、はるかによいことではないでしょうか。この秋には3万㎡の土地に200万本のコスモスが咲き誇ります。

いずれにしても、きれいな花の咲く、美しいところへは、ごみが捨てられにくいのは確かか



▲相模川の河川敷に植えられたコスモスの花

ようです。

平塚市には、工場排水を浄化するなど、相模川の環境をよくするための組織として「相模川をきれいにする協議会」があります。この団体は、今から33年前の昭和40年に市内の主要企業（現在の会員数93事業所）が率先して“母なる川”をまもろうと立ち上がったもので、会報も既に46号を数えています。もちろん、この流域協議会にも加入させていただきました。

さて、河川の水質を維持するには何といたっても公共下水道の整備が必要ですが、市では膨大な費用をかけて早くから力を注いで来ました。平成9年度末現在で、整備人口比の普及率は77.4%に達し、管渠の総延長は67万5,200mとなっています。

また、相模川に寄せる市民の関心も高く、昭和51年に開館した市博物館は「相模川流域の自然と文化」をテーマにした各種の資料を展示しています。当市にお立ち寄りの節はぜひご見学ください。入場は無料です。



## 相模川の中川にあった「猿ヶ島」

厚木市の北の外れに「猿ヶ島」という地域がある。二、三百年前までは、蛇行する相模川の中川になったり岸に着いたりしていたかなり広い土地だったらしく、よく肥えた一帯には数十戸が営農していたようだ。この「猿ヶ島」の地名の由来は、丹沢の山猿が作物を目当てに出没を繰り返していた——からではない。

相模川は当時、名うての暴れ川であった。春の長雨や台風シーズンともなればしばしば、住民たちは土地を捨てて避難を繰り返さねばならぬ、やっかいな土地柄であった。数十年に一度くらいは、家屋敷だけでなく、肉親までも失う悲劇に遭ったことだろう。いま一帯には、熊野天神社、稲荷社、本立寺などの社寺が祭られていて、当時から住民たちが水への感謝と祈り、犠牲者への供養につとめていたことをうかがわせる。昭和橋に近い浮島弁天も、流れを変えるために爆破した跡地に、水神様のたたりを恐れて建立したものだという。

### 桂川・相模川について

桂川・相模川は、富士五湖の一つである山中湖を水源とし、山梨県から神奈川県を流れて相模湾に注ぐ全長113km（幹川流路延長：建設省）、流域面積1,680km<sup>2</sup>の一級河川で、山梨県内では桂川、神奈川県内では相模川と呼ばれている。

上流域は、富士山と御坂山地、丹沢山地、大菩薩山地などの山並みに囲まれて、これを縫うように大小の支川が合流して流れている。

また、中流域の城山町から下流にかけての左岸側には相模野台地と呼ばれる弧状の台地が広がり、厚木市から河口にかけては、河川に沿って沖積低地が広がっています。

流域の25の市町村（山梨県12、神奈川県13）には、約130万人が生活しています。

安政年間になって島からの移住計画が出され、安政6年（1859）の横浜開港のころから、河岸段丘を西に越えた原野に移り住む人が出始めた。住民らは全村移住を決めたが、当初移り住んだのは十数戸といわれ、移住は昭和の初めまで散発的につづいたらしい。松や杉が生い茂る原野を拓いて田畑にかえたその地が、いまの「新開」であるという。初代移住者宅のそばには「新開発祥之碑」が建つ。うっそうと茂る立木を1本ずつ伐り拓く作業は困難を極め、過半数の人々が移住を断念して中川にとどまったようだ。

「猿ヶ島」という地名は、「着のみ着のままサルのように逃れ」なければいけない自分たちの姿を、無念の思いで島を「去る」気持ちに重ね合わせて、そう呼び慣らすようになったものらしい。

川が怒るたびに、簀笠、わらじ姿で田畑や村落を守った猿ヶ島、新開の先人たちの労苦を、私たちは忘れてはいけないだろう。

### アジェンダ21桂川・相模川について

1992年6月にブラジルで開催された地球サミットで、21世紀に向けた人類の具体的な行動計画としてアジェンダ21が合意されました。

アジェンダ（agenda）とは、「課題」、「今から取り組んでいくべき課題一覧」という意味で、アジェンダ21は、21世紀に向けた課題という意味で用いられています。

流域協議会で策定したアジェンダ21桂川・相模川は、桂川・相模川流域のローカルアジェンダ21で、持続可能な発展を基調にした環境保全型社会（エネルギーや資源の消費が少なく、環境負荷の少ない生産形態やライフスタイルを実現した循環型社会であり、生物の多様性が確保された社会）を築くための行動計画です。





## 流域協議会会員募集中

当協議会は、桂川・相模川の流域の行動計画である「アジェンダ21桂川・相模川」を推進することにより、桂川・相模川の流域環境の保全を図り、持続可能な発展を基調にした環境保全型社会を築くことを目的としています。

この目的を達成するため、「アジェンダ21桂川・相模川」の推進や桂川・相模川の流域環境の保全を図るために各種事業を進めています。

今年度は、会員相互の交流と連帯を促進するための上下交流事業、環境保全のための行動への参加機会を提供するためのクリーンキャンペーンや「アジェンダ21桂川・相模川」を充実するために部会を設置し、専門的な検討なども行っています。

また、今年度中に「シンポジウム」の開催も予定しています。

これからも、桂川・相模川の流域環境の保全に

ついて、多くの皆さんにご理解と参加をいただき、いっしょになって取り組んでいきたいと考えています。

協議会では、今後もいろいろな場面を活用してPRしていきますが、会員の皆さんにおかれましてはご協力をお願いします。

## 専門部会が始まりました

9月から「アジェンダ21桂川・相模川」の行動計画について話し合いを開始しました。これまで水質・水量をテーマに共通認識を深めるための資料説明などが中心でした。

10月は相模川の水収支について建設省京浜工事事務所調査課の奥秋さんから資料に基づいて説明がありました。今後もテーマを変えながら専門部会を開催し、行動計画をたてていきます。どなたでも参加できますので、希望者は事務局にお問い合わせ下さい。

## 表題「あじえんだ113」は こうして決まりました

発刊に先立ち、会員から表題の案を募集し、8月4日の『森林の下草刈り』参加者にアンケートで投票を求めました。圧倒的に支持されたものはなく票は割れましたが、「アジェンダ」「アジェンダ21」「清流」「113(キロ)」などの用語が上位を占めました。選考を任された編集委員会ではそれをふまえて、流域環境を守り育てる行動計画を意味する「アジェンダ」のことが多くの人々に知られ、定着することを願い、流域の広がりやを代表する「113」の数字を組み合わせて『あじえんだ113』と決めさせていただきました。

[題字デザイン] 上野 節子(茅ヶ崎市)



## あ・と・が・き

- 「今はもう秋誰もいない海…」いえ、いえ、相模川の河口はサーファーが一杯。プラスチックのゴミ、空き缶……。汗をかきながら拾うクリーンキャンペーン。海の底を想像すると、やはり元から断たなきやだめ。この「あじえんだ113」も大切にされる内容をめざしたい。(K)
- 昔は、「三尺流れれば水清し」であったかもしれないが、現在は、ごみの種類が違う。いつまでたっても腐らない物や人体に有害な物質が川に排出され、三尺(90.9cm)どころか113キロメートル(桂川・相模川の全長)も流れても水は清くならない。なんとかして、昔のことわざを復活させたいと思っています。(S)
- 「若者の心の荒れ」が深刻化していますが、下敷きになっているイライラ、ムカムカの潜在は、幼少期からの自然とのふれあいが、きれいに取り去ってくれます。命の洗濯をかねて、親子で一緒に川や野山に出かけましょう。(A)
- 発行が遅れてしまいましたが、協議会活動をお知らせする手作り感覚?の広報誌です。(G)
- 桂川・相模川アジェンダ21に参加させていただいて、ほんとうに大勢の方々が、川を愛し、また多くの知識をもっていることに驚いています。これからもたくさんの人が参加してくださることを……(T)
- 相模川の水質改善も環境保全も課題の大きさ、多さが見えたのですが、最大の課題は、立場の違う人が集まった会議の合意のむずかしさと自由参加の議論の進み具合。気長に素早く、議論と問題解決のための行動。いつも背中合わせの矛盾した課題にむかう楽しさ(?)は抜群かも。(M)
- 上野原町では町を縦断して鶴川と仲間川が流れ、住民の飲み水としての役をなし、桂川に流れ込んでいます。この桂川が神奈川の飲み水となることを考えると、流域の住民が共に生きていると強く思います。(N)

あじえんだ113 Vol.1 No.1 (1998.12.1発行)

発行 桂川・相模川流域協議会  
編集 あじえんだ113編集委員会

事務局 山梨県環境局環境活動推進課 〒400-8501 甲府市丸の内1-6-1 TEL (0552)23-1503 FAX (0552)23-1507  
神奈川環境部水質保全課 〒231-8588 横浜市中区日本大通1 TEL (045)201-1111 内3786 FAX (045)212-8343

(この冊子は再生紙を使用しています)